第７回指宿枕崎線(指宿・枕崎間)の将来のあり方に関する検討会議
議事概要

日時：令和８年９月 30 日（水）14:00-16:00
場所 ホテル自治会館 401 会議室
「指宿枕崎線（指宿・枕崎間）の将来のあり方に関する検討会議」について、第７回会議を開催したところであり、その議事概要は以下のとおり。

１．開会
２．冒頭挨拶 【鹿児島県総合政策部交通政策課長】
３．報告
人事異動及び組織改編により委員及び所属名称の変更があったことを事務局より説明
４．議題
【議題１】実証事業の進捗状況について
・ 事務局、各沿線市及び九州旅客鉄道株式会社（以下、ＪＲ九州）よりそれぞれが担当する実証事業について資料をもとに説明

【質疑応答】
（九州運輸局）
・ ２年目の実施となる貨客混載実証事業について、昨年度よりも参加事業者が増えているとのこと。現在の参加事業者数、どのようなものが輸送・販売されているか。貨客混載実証事業については、前回会議で他の委員から、「実証実験で終わらせず持続していくための体制づくり」の話があった。実証事業終了後は、利用事業者に聞き取りなど行い、しっかりと形にしていただくことを期待する。

（事務局）
・ 現在、貨客混載事業に参加されている事業者様は、全体で７店舗ある。内訳は、指宿駅から輸送している事業者様が３店舗、西大山駅から輸送している事業者様が１店舗で、枕崎駅から輸送している事業者様が３店舗。主な輸送商品は、ベーグル、マンゴープリン等、お菓子類が多いところ。その他、枕崎市の事業者様からさつまあげが輸送されている。

（ＪＲ九州）
・ ふるさとミライカレッジ実証事業に参加した学生からの参考になる意見はあったか。

（南九州市）

・　３つの大学等の学生が既に１回目の実習を受け終えて活動されたところ。すごく元気がある活発な学生さんたちばかりであった。そういった都会に住んでいる学生が、地方に来られた際に、まず驚いたのは、住みやすそうだという意見をいただいたことがとても印象に残っている。

・　不便であるということは事前に伝えていた。物理的なことではなく、環境的なところで住みやすそうというところを熱心に言っていたことが印象的であった。

・　その他、昼食に指宿市、枕崎市も含め色々なお店を紹介し、同行したが、食べ物がおいしいということを言っていた。我々が普段、享受している価値を外の視点から、しかも若い方々から言っていただけたことについては、評価するポイントだと思っている。

（神田教授）

・　今回の南九州市のふるさとみらいカレッジ実証事業にお声かけいただき、弊校からも４名の学生に参加してもらった。参加にあたり、学生に事前情報はあまり入れずに送り出したが、学生たちは総じて実証事業に参加し、満足して帰ってきた。

・　南九州市の環境だけでなく、地域で活躍されている方々と接し、どんな思いでどんなことをしているかという、物語的なところに触れられたことが良かった。学生にとって、温かみのあるところに触れることができたことは満足だったようだ。11 月の実証事業についても楽しみにしており、地域への愛着も高まっている。

・　また、学生が実際に駅舎を触るなど、現場ならではの経験ができた。教育する側からも現地のものを触れるということは本当に意義があると思っている。

・　また、現地でお世話になった企業に就職してもよいという学生もおり、人材不足と言われている中で、このような活動を通じて、学生と社会の接点を作っていくのもひとつの可能性はあるかと思っている。

（議長）

・　外から見た価値として新しい発見があるということで、今後の取組についても、期待したい。

（神田教授）

・　昨年度から実証事業を進めてきた中で、現段階では量的な効果を追い求めるというよりも、「鉄道にこういう使い方がある」「別の視点から見ると、こういう見方もできる」という可能性の種を見つけ、育てていく段階だと感じている。現状はこれでよいと考えており、鉄道や鉄道関連施設の新たな使い方を具体的に示せていることに価値がある。

・　鉄道については、どうしても乗った、乗らないという視点だけで議論しがちだが、沿線住民や民間企業にとっては、鉄道にどう関われればよいかわからないという状況が多い。だからこそ、実証事業を通じて関わり方を示していくことが重要。そうした実績を基に対話を重ねることで、関与したり、一緒に考えたりできる方々が増えていくと良い。
・　そのためにも、進行中の実証事業も含め、どのような取組を行い、何ができているのか、どのような方々が参加しているのかを、地域や関係者にこまめにフィードバックしていくことが大切。そこから、さらに新しい取組のアイデアや、参加したいという住民の動きが出るような循環ができていくとよい。
・　今後は、新たな価値のパターンを広げていくことと、これまでに生まれた価値をさらに深めていくことの２つの軸で、取組を進めていければと考えている。

【議題２】検討調査事業の進捗状況について
・　事務局及び検討調査事業委託業者（ＥＹストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社（以下、ＥＹＳＣ））から資料に沿って、今年度の検討調査事業について説明。
　－　価値推計については、昨年度の基本構造は維持しつつ、①活用データの充実化、②拡充された実証事業の成果の反映、③社会の環境変化に対する考慮、④金銭換算できない定性的価値についてもより伝わりやすく表現する、以上の４点について、昨年度の考え方に補足していく想定である。
　－　今年度は、現在、沿線３市の住民や来訪者に対して、移動実態調査、行動意識調査、通学調査等のアンケートを事務局において実施している。

【質疑応答】
（神田教授）
・　価値推計については、決められたパターンの中で、計算した結果の数字が出てきているため、その数字が意味するところはしっかりと解釈する必要がある。一方で、先ほどの実証事業などを通じて、新たに分かってくることもある。そうしたものの中には、価値推計に含まれるものもあれば、含まれないものもたくさん出てくると思う。
・　そうなると、数字で言えることと、それ以外に新たに見えてきていることの両方があるため、数字を尊重しつつも、そもそも価値とは何を意味するのかという全体の枠組みもしっかりと踏まえて、総合的に判断していく必要があるのではないか。

（議長）
・　今後の議論の基礎資料として、価値推計や実証事業による成果、それらが意味する価値、強み、そういったものも含めてしっかりと全体像として整理していく必要があ

る。

【議題３】事例視察の報告

・　事務局より資料に沿って、説明
　－　小湊鉄道の取組
　－　小湊鉄道の取組から得られた気づき
・　各委員による視察の振り返り

（指宿市）

・　今回の視察を通じて、鉄道というものについて、地域を主語にして考えることや、地域プレイヤーの顔が見えるコミュニケーション、地域としての当事者意識を高めていくことなどが得られた示唆だと感じている。やはり、行政だけではなく、地域の方々をいかに巻き込み、当事者意識を高めていくかというところが非常に大切だと思う。今後も、実証事業などを含め、こうした課題を念頭に置きながら、取組を進めていければと考えている。

（南九州市）

・　実証事業等をここ１年、２年と取り組んできて、やればやるほどいろいろな課題が出てくると、改めて感じているところ。
　今回、アンケートを通じて、いろいろな市民の声が見えてきていると思う。まだ詳しく見てみないと具体的なことは申し上げられないが、住民の方々がどう思っているのか、あるいは住民をどう巻き込んでいくかという点について、住民視点と行政視点を合わせて考えていかないといけないと、改めて感じているところである。

（枕崎市）

・　私は今回の視察に参加できなかったが、担当及び係長から、鉄道を生かした取組や、地域と一緒になって取り組んでいる姿が非常に参考になったという話を伺った。
　先日、総務省から国勢調査の人口が公表されたが、特に南薩地域は人口減少が進む地域であり、我々としても、この地域をどう活性化していくかを考えていかなければならない。指宿市、南九州市、枕崎市、南さつま市も含め、それぞれが独自の地域振興施策を考えていると思う。その中で、本市としても、産業・観光振興をはじめ、ふるさと住民登録制度の開始など、関係人口の創出に向けた取組を進めていく必要がある。
・　これらの取組に共通するのは、広域で取り組むためのプラットフォームとして、沿線自治体に指宿枕崎線があるということ。さまざまな取組の中で、指宿枕崎線を活用しながら地域振興を図っていく、今の取組をさらに進化させていかなければならな

いと考えている。

・　また、先ほど神田教授からもお話があったが、民間、地域の方々とどう関わっていくか、どう関わっていただくかということも重要。県外や市外の方々がどのように関わっていけるのかについても、地域の皆さんと一緒になって考えていかなければならないと考えている。

（県南薩地域振興局）

・　今回の視察の内容を聞き、「みんなで支える」という視点が一番大事なのだと、改めて認識したところ。ただ、住民の方々に「みんなで支える」という意識を持ってもらうためには、まず、今走っている鉄道がどういう位置づけにあるのかという認識を、地域全体で持っておく必要があるのではないかと思う。

「みんなで支える活動」と「みんなに支えてもらう活動」の両面について、それぞれどう考えていくべきかということも含め、今後、皆さんでいろいろと考えていければと思う。

（ＪＲ九州）

・　検討会議が発足してから３年目に突入し、議論を先延ばしにすることが許されない時期に来ていると認識している。今回、新たなステップとしての小湊鉄道様の視察に行くなど、少しずつフェーズが変わりつつあり、議論の深みが増してきたと実感している。

・　従来から申し上げているとおり、現状のままでは鉄道運営が厳しい状況に変わりはない。一方で、鉄道が地域にもたらす価値や、地域の方々の巻き込み、人を惹きつける存在としての意味を考えることが重要である。つまり、「まちづくりの中で鉄道をどう生かしていくのか」という視点であり、これまでの議論も少しずつ結びついてきていると感じている。

・　今回の小湊鉄道の視察や意見交換で特に印象に残ったのは、「みんなで支えている」ということ。これは今後の議論のキーワードになると思う。公共交通の持続可能性を高めるためにも、自治体や地域の方々も一緒になって支えていくことが非常に大切である。また、元富山市長の話も例に取り上げていたが、公共交通への投資は意義があるという考え方も伺った。視察を通して、皆様と同じ方向を向いているのだと、改めて認識した次第である。

（ＥＹＳＣ）

・　皆様からのコメントのとおり、鉄道会社を主語とするのではなく、地域を主語としたうえで鉄道のあり方を捉えているところが、非常に印象的だったと感じている。今後は、いかに指宿枕崎線のあり方を地域主体の取組の中に位置づけていくか、また、

いかに地域外からも人材やアイデアを活用しながら地域の皆様の熱量を高めていくかというところが、議論を深めていく上でのポイントではないかと感じた。この点については、検討調査事業の業務の中でも、議論の材料を提供していければと考えている。

（神田教授）

・　今回、３年ぶりに小湊鉄道を訪れ、３年前と比べて雰囲気が大きく変わったと感じた。以前は、それぞれが何とかしようと考えていても、活動がうまく絡み合っていない印象であったが、今回は、地域のさまざまな方々の活動が少しずつつながり始めていると感じた。

・　特に印象的だったのは、草刈りや清掃活動など、それぞれができる範囲で、適度な距離感を保ちながら関わっている点である。鉄道事業者としては、安全面などから難しい部分もあるが、草刈り活動では、活動の主催者にはならずとも、差し入れや資材の提供などで地域の善意をうまく生かしている。そうした関わり方が、さらにコミュニティを広げていくのだと感じた。我々も、住民の方々をどう巻き込んでいくか、鉄道というデリケートな問題にどう関わってもらうかという点で悩んでいるが、今回の小湊鉄道の取組にはヒントがあったと感じている。協議会などが一定のプロデュース役を担いながら、適度な距離感で地域の方々を巻き込んでいくことは、できるのではないか。もちろん、取組がどのような結果につながるかは、やってみなければ分からない。それでも、地域を何とかしたいという本気度を持って進めていくことが大切だと思う。３年前と比べ、鉄道事業者自身も地域との関わり方をつかみ始めているのではないかと、外から見て感じたところ。

（議長）

・　皆さんの話にもあったが、地域で支える、地域を巻き込んでいくことが必要だという点は、共通認識としてあると感じている。その上で、鉄道が沿線地域にとって、どういう意味合いや立ち位置にあるのか、住民の意向はどうなのかといったことも意識し、議論しながら、適切な距離感も見据えて地域と向き合い、しっかりと巻き込みに取り組んでいく必要があるのではないかと、今回の視察や皆さんのご意見を聞きながら感じたところである。

以上